

VI章 「山結」の社会と人々

卑弥呼連邦国は「狗邪韓国(金海)」から「投馬国(那覇)」までを繋ぐ広大なライン上に存在した超大国であった。連邦は首都を「邪馬国の中央区京町台地」に置いた。首都には「大倭王(山結の王)」が居た。この大倭王は卑弥呼、壺与など特別な時期を除いて、代々「熊(隈)氏」の王だったのであろう。よって、熊本の名として残ってきた。

「山結」の社会と人々の暮らしはどのようなものだったであろうか。

卑弥呼

(1) 卑弥呼をどう読むか。一定しない。

邪馬台国の女王卑弥呼の洛陽古音はpiei miei yaでその訓みはヒムカである。唐の張楚金撰、雍公叡注の『翰苑』には「卑弥娥は惑わすも翻つて群情に叶い、台与は幼齒なるも方に衆望に諧う」という句があつて、卑弥呼を卑弥娥としている。もつとも、下の句によれば「卑弥は娥惑するも」と読まれたであろうが、作者張楚金は卑弥娥とした文献を見たと考えて誤りあるまい。

『邪馬台国をめぐる言語10の知識』長田夏樹

「ヒムカ」は「日向」とつながると思われるが、「卑弥呼」は地名を表す言葉だったのであろうか。三木太郎氏は卑弥呼を「ヒ・メコ(日・女子)」と読み、「ヒコ(日・子)」に対応することばと見るべきと述べている。「メコ」は現代でも女性をさす言葉である。

「卑弥呼」とは実名ではない。彼女の職は「祈禱」である。「弥呼」は「巫女」「神子」に通じる職を表す日本語と思われる。「卑」は「日」とし、「日のミコ」と理解するのが常識であるが、この理解に立てば古代インカや古代エジプトなどと同じ太陽神信仰と結びつく。

果たして、卑弥呼はそのような「穏やかな神」「遠くの神」に仕えたのであろうか。

「卑」は「火」ではないだろうか。卑弥呼の都は熊本市中央区である。熊本には阿蘇山がある。「阿蘇」の名は「阿」と「蘇」、「姫氏」と「熊氏」の王名から一字ずつとったものかと思える。この山が「山結」の氏族にとって特別な山だった故である。阿蘇は鉄をもたらす「火の山」である。鉄は雷。鉄は火。鉄と火の神が共存する。

『隋書』は当時の阿蘇山と禱祭の様子を伝える。

有阿蘇山其石無故火起接天者俗以為異因行禱祭

故なく噴火し、石は天に届く。この異因に祈りを捧げなければならない。神と交信できる「ミコ」が居るといふ。「祈禱」の伝統を引き継ぎ、まだ幼い少女だが、この「ミコ」なら阿蘇火の神に仕えることができよう。連邦の王たちによって彼女が丁重に迎えられたのは連邦内乱を鎮めるためであったが、そのために阿蘇の神への鎮めを求められたからであろう。卑弥呼の「宮室」は熊本市の高台でなければならなかったのである。

(2) 卑弥呼はこのような人だったのではないか、そう思える人が沖縄に伝わる。沖縄は『倭人伝』の「投馬国」である。「投馬国」は女王連合の一つで、同じ文化圏、言語圏であった。自立の道を歩んだ琉球王朝には日本本土では、とつきの昔に滅びた文化、言語が残ってきた。2020年12月13日、NHK放映の「祈りの首里城」において、「神女」が紹介されている。首里城には「御嶽(うたき)」と呼ばれる神聖な場所が10ヶ所存在する。神女たちは王族と共に城内の「御嶽」を巡り、王の長寿、五穀豊穡を祈った。この儀式を「百人御物参」といふ。神女は黄金の簪で髪をとめ、首に勾玉をかけ、白い衣を着ている。祈りは静かで、敬虔である。初めに両手を合わせ大地を30回軽くたたく。三十拝という。大地の神を呼び起こし、大地の神に祈っているように見える。火を焚いて激しく動き祈禱するという通俗的なイメージとは全く異なる。

首里城の「御嶽」で祈りを捧げる神女は卑弥呼を彷彿させる。「御嶽」は「山」を意味する。卑弥呼が住む館でも勾玉を首にかけ白い衣を着た卑弥呼が「御嶽(阿蘇山)」に国の安寧、氏族の長寿、五穀豊穰を祈ったのではないだろうか。

首里城には王と神女が太陽の昇る東に向かって手を合わせる場所があるが、一般家庭では台所に香炉を置き、家族の健康、親しい人の健康を「ヒヌカン」に祈ったという。

沖縄の古語には「エ」と「オ」はない。「遊び」は「アシビ」である。卑弥呼の時代の日本語には母音の「エ」「オ」はなかった。「ヌ」は現代音では、「ノ」である。民間信仰の「ヒヌカン」とは「火の神」となるであろう。人々は「火の神」に祈ったということである。

卑弥呼が「琉球神女」と同じ存在と考えれば、「ヒミコ」は「火神女」がもっともふさわしい日本語と思われる。以下、卑弥呼を「火神女」と書いてみる。

- (3) 「火神女」の国は二つの実存不安を抱えていた。一つは「狗奴国」との対立である。この対立には魏の仲裁を求めている。もう一つの不安は、「山結」内の「姫氏」と「熊氏」の氏族対立である。彼女の祈りは二つの氏族の共存への祈りでもあろう。『倭人伝』は、「能く衆を惑わす」と書くが、「火神女」の平和への祈りが人々に通じたということである。

- (4) 「火神女」のルーツについて『倭人伝』は何も記さないが、『記紀』の中にそのルーツを探るヒントがある。「火神女」の後を継いだのが「壹與」である。「壹與」は「伊代」「一葉」など、現代名に通じる女性の名前である。『翰苑』では「臺與」である。「臺與」も「登世」「豊」などこれまた現代の女性の名前にある。「壹與」「臺與」は「火神女」という「職名」と異なり「実名」である。この二つの実名が『記紀』に現れるのである。

『記紀』『州産み』に「伊豫二名島」が現れる。この島の女王には「二名」があった。「伊豫」と「豊」である。従って、「伊豫二名島」と呼ばれたのである。

『魏志』の「壹與」は『記紀』では「伊豫」である。『翰苑』「臺與」は『記紀』では「豊」である。「火神女」と壹與は「宗族(同じ一族)」という。つまり、「火神女」と壹與は「伊豫二名島」の出身といえる。ちなみに、『記紀』「伊豫二名島」とは下関市彦島老町である。ここは天照大神の故郷である。

「火神女」は、天照大神の「祈り」を受けつぐ「神女」だったといえよう。「火神女」は「天照」「天孫ニギギ」「神武」と続く「阿米」の一族である。連合国の「姫氏」と血縁関係にあった。よって、連合の王たちによって共立されたのである。

- (5) 景行紀に、「八女縣の女神」が登場する。「八女」の地名説話である。

景行18年秋7月7日に、八女縣に到る。則ち藤山を越えて、南粟岬を望りたまふ。詔して曰はく、「其の山の峯岫重疊りて、且美麗しきこと甚なり。若し神其の山に有しますか」とのたまふ。時に水沼縣主猿大海、奏して言さく、「女神有します。名を八女津媛と曰す。常に山の中に居します」とまうす。故、八女國の名は此れより由りて起れり。

景行天皇は神武を祖とする九州天皇家の天皇である。御所は福岡県みやこ町にあった。八女の「縣」は「熊襲」の行政区名である。八女を含め、九州西部は「山結」支配下である。「山結」連邦は行政区名を「縣」とした。一方、景行天皇家は「郡」を行政区名としていた。景行天皇は「若し神其の山に有しますか」と問うている。水沼縣主は「女神有します。常に山の中に居ます」と、答えている。この「女神」は人である。祀られた神ではない。言い換えれば、「神女」である。「其の山」とはみやま市「女山」であろう。この山はかつては、「女王山」と呼ばれていた。みやま市「女山」にある旧「日子神社」が「火神女」の館ではないかと伝わっているが、景行紀の「八女津媛」は『倭人伝』『火神女』ではない。またその末裔でもない。しかし、「女山」もまた「神の山」として信仰されていたと言えるであろう。

倭王并

拝假倭王并齋詔賜金帛錦鬪刀鏡采物

倭王并(かつ)に拝假(はいか)し、詔を齋(せい)し、金帛(きんはく)・錦鬪(きんけい)・刀鏡・采物を賜う

- (1) 正始元年(240年)の記事に倭王が登場する。この倭王とは「火神女」ではなく、男王である。「并」の通常の用法は「併(あわせる)」「並(ならぶ)」である。この文において「并」がこの意味で使用されているとすれば、「并」は浮いてしまう。
「拜假倭王」は「倭王に拜假し」、「齋詔」は「詔を齋(もたら)し」である。「賜金帛錦罽刀鏡采物」は「金帛、錦罽、刀、鏡、采物を賜った」となる。「并」は通常「併せて詔をもたらし」と読まれているが、「拜假」と「齋詔」を「併せる」という用法はないであろう。
- (2) 「并」には別の用法がある。それは人名としての用法である。「かつ」と読む。この文では「倭王并」と読むべきである。「太伯」の伝統を継ぐ中国一字名である。帯方郡太守弓遵の使者、建中校尉、梯儁は女王の都にやって来た。しかし、「火神女」には会っていない。正始元年(240年)、「火神女」は「以(すでに)」死亡していた、と考える研究者もいる。そうかもしれない。使者は王と会った。その王は連邦を代表する王であろう。王は、当然、名を名乗った。「并(かつ)」である。
- (3) 「并」は「克」、或いは「勝」であろうか。6世紀、筑紫の君「磐井」の子どもは「葛子」と言った。この名前も「かつし」と読むべきである。『神武紀』には「兄猾・弟猾」が登場する。彼らの名前も「猾(かつ)」である。この兄弟は「菟田縣(小倉南区)」の長官で、「縣」とは「熊襲(熊氏)」の国の行政区名であった。神武の時代に「熊襲(熊氏)」はすでにこの行政組織を確立していた先進国だったのである。「猾」兄弟は「熊氏」一族である。
倭王「并」は「21ヶ国連邦」を代表していた王であろう。彼は熊本市中央区京町に居た。
- (4) 『紹熙本』は「対海国」「一大国」「末盧国」「伊都国」「奴国」「不禰国」「投馬国」の行政官名を書いている。そして、「伊都国」には王が居たことを伝えている。なぜ、「伊都国」には王が居たのか。その理由は、「姫氏松野連系図」から考えるしかない。「姫氏系図」の初代の王、「忌」は菊池郡に上陸して国を作った。「鬼国」である。二代目「順」は「鬼国」を出て、「委奴国」を建国したと伝える。この国が吉野ヶ里である。遺跡から王墓が発掘されている。
2世紀末に王家は吉野ヶ里を棄て佐賀市に移ったと考えられる。この国が『倭人伝』「伊都国」である。「順」の王統は生き続け、「伊都国」には特別に王家が存在したのだと思われる。「山結」には「22国の王」と「伊都国王」が居た。そして「山結」を代表する王が居た。この「并(カツ)」は「山結」を代表する連邦の王であろう。

載斯烏越

遣倭載斯烏越等詣

少帝正始八年(247)年の記事である。「烏越」は「ウエツ」であろうか。不明なのは、「載斯」であるが、現代日本語に変換すると「祭司」「祀司」であろう。

烏越氏は「火神女」の国の葬祭を司る神官だったのである。「山結」が存在した九州西部の都市には多くの古墳が存在する。死者を埋葬するとき、儀式が行われたのは当然で、その儀式を司る祭司が烏越氏だったというわけである。

祭司烏越は連合22国の一つである「烏奴国(宇土市)」の出身であろう。姓は「宇」、名は「悦」であろうか。「祭祀・宇悦」なる人物である。

難升米

景初二年六月倭女王遣太夫難升米等詣郡求詣天子朝献

景初二年六月、倭国の女王は太夫「難升米」等を遣わした。彼は帯方郡まで行き、「天子に詣りて、朝献したい」と求めた。

「難升米」は「米」が名で、中国一字名である。「難升」の「升」は「将」であろう。「米」は武官である。「魏」への使者が武装していたのは当然で、軍人を中心とした一行だったのであ

る。「難」の日本語が難しいが、「南」であろうか。「南将・米」が肩書き及び名となろう。『後漢書』に次の文がある。

安帝永初元年倭国王帥升等献生口六十人願請見

通常「倭の国王帥升らが生口六十人を献じ、請見を願うた」と読まれる。「帥升」は王名と捉えられている。だが、「升」が「将」とすれば、「帥将」は王の名前ではなく、「軍の将」の名前となる。ここには、「等」がある。倭王一人を云うのに、「等」は不要である。「倭国王」「帥将」等、つまり、「王」と「将」の二人が主語である。「升」を使った官名は他にもある。「山結」の官に「弥馬升」がある。この「升」も「将」で、「山将」の意となる。「山結」の軍を統率する「将」であろう。

生口

- (1) 『紹熙本』に「生口」という不思議な人物が登場するが、解釈は一定しない。「奴隷説」「留学生説」「捕虜説」「捕魚者説」等があるが、その原因は漢字と日本語が一致しないかである。「生口」を「セイコウ」と読む研究者がほとんどであるが、この読みでは日本語にならない。
- (2) 「生口」は呉音で「ショウク」と読むのである。「ショウク」を日本語で書くと「小工」である。「生口」＝「小工」。「工」は職人を表す日本語である。「小工」は現在減びているが、対の言葉である「大工」は生きている。「小工」という言葉が減びたのは実体がなくなったからである。ゆえ、「生口」と「小工」を結びつけることができず、解釈が混乱したのである。
- (3) 「火神女」の国は「大工」「小工」による手工業製品の一大産地だった。魏皇帝に献上された「班布」「倭錦」「縣衣」「短弓矢」などは「山結」の手工業品である。「倭錦」とは絹である。「山結」の人々は、桑を植え、養蚕して倭製の絹布を生産していた。男女「小工」が「火神女」の国の農産業、手工業の担い手だったのである。
- (4) 『紹熙本』には、「男子無大小皆鯨面文身」とある。「大小」は「大人と小人(子ども)」の意であろう。そう考えると、「小工」とは「小人(子ども)の工人」の意で、「大工」は「大人の工人」の意となる。

機織りは根気のいる仕事ではあるが力は要らない。「機子」と伝えられるように昔から子どもの仕事だった。魏皇帝の前に立った「生口」とは、子どもだったというわけである。

持衰

其行来渡海詣中国恒使一人不梳頭不去蟻蝨衣服垢汚不食肉不近婦人如喪人名之為持衰若行者吉善共願其生口財物若有疾病遭暴害便欲殺之謂其持衰不謹

女王国からの使節一行が海を渡って中国に詣る。恒に、一人は頭を櫛けずらず、蟻蝨(しらみ)をとらず、衣服は垢に汚れたままで、肉は食わず、婦人を近づけない。喪人のように振る舞う。これを名付けて「持衰」とする。もし一行が吉善であるならば、「持衰」の「小工」、財物共に「願(不詳である)」、もし、疾病、暴害に遭えば「持衰」を殺そうとする。「持衰」が謹まなかったからだというのである。

- (1) 「其行来」は「その行来」と読むべきではない。「往来」はあっても「行来」はない。「其」は「倭」を指すが、「行」は名詞、主語である。現代日本語でも「ご一行様」と使われるように、「行」は「一行」の意味で、「其行来」の訓みは「その(倭の)一行が来たる」である。
- (2) 倭の一行は中国に行く際、「持衰」を同行していた。難語であるが、その役割から考察すると、「持衰(ジサイ)」とは「除災(シサイ)」であろう。「災いを除く者」という意味である。「除災(シサイ)」は「除目(ジモク)」と同じく、呉語である。
- (3) 「持衰」を非科学的というのは簡単であるが、現代でも同じ意味の「除」を用いた言葉が民間でよく見られる。代表が「厄除」「除厄」である。「厄年」に当たる多くの人が神社仏閣を訪れる。「厄年に厄除けしなかったから病気になる」というようなこともよく云われる。これは「持衰」の役割と変わるまい。また、同じ「除災」もある。ただ、読みは「じよさい」と漢音読み

であるが、意味は文字通り「災いを除くこと」である。「除災招福」とも云われる。「方除け札」というものも売られている。「魔除け」「八方除災」もある。みな、「除」をつかう。

『倭人伝』「持衰」は私たちの身近な所にいる。

- (4) 「持衰(除災)」は、一行が旅で「疾病」「暴害」に遇ったら殺されるという、本人の意志、努力を超えた仕事について。現代の神・佛は願いが成就しなかったからといって殺されることはない。だが、「持衰」は生身の人間である。「持衰」はこの任務を誇りとしたか、不運と感じたかは分からない。一行の命運を背負った「持衰」は元々そういう専門職だったのか、それとも、その都度選出されたのかどうかも不明であるが、「持衰」の役割が「人」から「神」に移ったのは確かであろう。旅に災難はつきものである。その度に人が殺されてはたまらない。

大人・下戸

下戸與大人相逢道路逡巡入草伝辞説事或蹲或跪両手據地為之恭敬対応声曰噫比如然諾

下戸が大人と道路で相逢えば、逡巡して草に入る。辞を傳え事を説くには或いは蹲(うずくまり)、或いは跪(ひざまづ)く。両手を地に據(きよ)す。これが恭敬(きょうけい)を為す。對應の聲は噫(あい)と云う。(中国語に)比するに然諾(ぜんだく)の如し。

「火神女」連邦国には少なくとも二つの階層があった。「大人」と「下戸」を記録している。『三国志』「魏志濊南伝」に「漢より以来、其の官に侯、邑君、三老有り。下戸を統主す」とある。(『邪馬一国の道標』p179古田武彦著)

「大人」「下戸」は魏の言葉である。倭語ではないが、「倭国の大人」とは「姫氏」「熊氏」王家一族であろう。「倭国の下戸」がどのような階層を表すか不詳である。

『倭人伝』は「大人皆四五婦下戸或二三婦」と書く。「下戸」にも妻が2～3人居る。「下戸」は独立した生計人である。「奴隸」とは云えないであろう。

「逡巡して」とは「立ち止まり」、「草に入る」とは「道を譲る」というほどの意味であろう。当時の道が広くはなかったということである。「草」に格別の意味があるわけではない。

「比するに噫とは然諾の如し」と説明がある。「然」は「その通り」、「諾」は「答える」の意である。「噫」は、「はい」、または、「あい」であろうか。どちらも日本語である。

下戸が使った「噫」は中国語と比べてみると「然諾」と同じだと書いている。「噫」は現代日本語で言えば「はい」である。「はい、わかりました」という意を持つ日本語「噫」がこの頃から使われていたという。日本語「はい」の歴史の長さを感じる。

文身

今倭水人好沈没捕魚蛤文身亦以厭大魚水禽後梢以為飾諸国文身各異或左或右或大或小尊卑有差

今、倭の水人、好く、沈没して、魚蛤を捕える。文身して亦以て大魚、水禽を厭う。後梢以て飾と為す。諸国の文身は各(おのおの)異なり、或は左に、或は右に、或いは大に、或は小にして尊卑に差がある。

「山結」の水人(漁師)は好く潜って魚や蛤を捕らえる。「山結」の多くの国は海に面した国である。豊饒の海、有明海がある。漁業を生業とする「水人」は今も変わらない。素潜りの漁法も受け継がれている。奈良盆地に「水人」の痕跡が残るであろうか。

伊支馬

『紹熙本』は、女王連邦の官名を記録している。

官有伊支馬次曰弥馬升次曰弥馬獲支次曰奴佳鞮

官名である「伊支馬」はどう読むのか。「馬」は「マ」で、官名は「イキマ」であろう。八女市宮野に「宮野生目八幡宮」がある。「生目」は「イキメ」と読まれている。「マ」が「メ」に変化したと考えると、この神社は、『倭人伝』が伝える「官・伊支馬」を祭神としているかもしれない。「伊支馬(生目)」は行政官トップで、いわば、連合の総理大臣であろう。次の官が「弥馬升」である。ここでは「邪馬」と書かずに「弥馬」と書いているが、同じである。「升」は「将」であろう。「弥馬升」は「山結の将」の意味となり、軍事大臣であろう。「弥馬獲支」も「山結の獲支(不詳)」の意で、正確には分からないが、国務大臣と思われる。



岩戸山歴史資料館
(八女市吉田1396-1)
(2016年閉館)

埴輪「鞍に乗る貴人」